あの日、死ぬかもしれないと思った

桜城小学校　六年　山田結心

「生きたいと思った。死ぬ事が怖いと心から思った。私は生きる。絶対に…。」

この約二年、新型コロナの影響で生活は大きく変わった。そして、命を守るための行動を私達も常に心に留めておくようになった。

学校行事がなくなり、大会がなくなった。私の姉は昨年度高校受験をしたが、受験方法も例年より大きく変わった。

皆が、全員が手探りで生きていた。

昨年の九月の事だった。私は食物アレルギーによるアナフィラキシーを起こした。私のアレルギーは小学校三年生の時に急に発症した。大学病院で検査をすると、食物以外も合わせて十種類以上のアレルギーが見つかった。

普通の生活が出来るのだろうか。そう考える程の種類だったのだ。

だが、反応があるからといって必ずしも症状が出る訳ではなかった。運動をするとアレ

ルギーが出やすかったので陽性でも反応が出ないものは夜に摂取していた。

先生達と母の綿密な打ち合わせがあって、私は五年生のキャンプも、六年生の修学旅行も、学年の皆と一緒に参加することが出来た。

食事の時は、私一人だけ全くちがうメニューで食器もちがう。テーブルには「山田結心様」と紙に書かれている。宿泊先やレストランの皆さんの協力があって、私は皆と一緒に思い出をつくることが出来た。母との約束で、いつもは症状が出た時に飲む薬を、念の為、食後に必ず飲むことにした。必ずエピペンを携帯した。皆と一緒に参加できるまでに私はアナフィラキシーでエピペンを打つという経験をしている。

五年生の九月、いつもの様に夕飯を食べていた時の事だ。三口程口にした所で腹痛がおきたのでトイレに行った。そのまま、食べた物をおう吐してしまった。のどが詰まる感じがして息が苦しくなった。私はいつも、じ

20×20

んましん程度では病院には絶対に行かない。でもその時は、

「まずい。死ぬかもしれない」。

と思った。母に話すと、母はエピペンを持ってきて

「打つよ」

と言った。エピペンを打ったら必ず病院に行かなければならない。

打たなければ死ぬかもしれない

苦しさと怖さが頭をよぎった。

エピペンは打ったら五秒、そのままでいなければならない。

「誰か五秒数えて！」。

母が叫んだ。でも姉は大の注射嫌い。妹は発達障害があり、私がそういう事をされていると、いじめられていると感じるようで既に泣いていた。その時

「ぼくが数える！」。

当時五才の年長組だった弟が言った。

一分一秒を争う！。母が

「はるちゃん頑むよ、いくよ！」。
と言って私の太ももにエピペンを打った。
「1、2、3、4、5！」。
夜もおそい時間に弟が数を数える声だけが響いた。そして私に
「痛くない？」。
と聞いてきた。息苦しさで痛みなどほとんど感じなかった。
そのまま病院へ行き、私は一日入院となった。私の症状も落ちついてきたので母は家に帰ろうとしたが、看護師さんが手薄だとの事で帰れず、後から聞くと、朝の四時に家に帰り、妹を学校へ、弟を保育園に送り、又病院に引き返してきた。
後日、かかりつけの大学病院を受診した時主治医の先生に
「お母さんよく打ちましたね。さすがです」。
と言われていた。母は医療関係の人でもないし、いくら注射とはいえ自分の子供に針を刺す、というのは勇気がいったと思う。

「先生に迷ったら打てと言われていたので本当はよく覚えていません」。
と母は言っていた。

とっさにエピペンを打ってくれた母、五秒を冷静に教えてくれた弟、入院の間、妹や弟を見ててくれた姉、病院の先生や看護師さん、たくさんの人のおかげで私の命がつながれた。

今新型コロナワクチンの接種が始まった。十二才の私にも接種券が届いた。私はアレルギー体質で、血中の二酸化炭素が多いので基礎疾患で打ったほうが良いと言われている。でも、アレルギーと化学物質過敏症があって、副作用が重いかもしれないと言われている。

打ちたいけど、打てないかもしれない！。ワクチンをあえて打たない人もいる。私のように打ちたいが難しい人もいるかもしれない。任意なのでそれは何も言えない。でも打った人が居るから守られているのだと思う。

死にたくないと思ったあの日を思い、私はウイルスの早期終息を願う。